〔足薪翁記三〕犬のさんた

犬にさんたせよ〳〵といへば、前足をあげてとびつく事のありしが、他國はしらず、江戸にてさる戯をする者を見ず、手をぐれといふが、此餘波ともいはん歟、

〔書言字考節用集五氣形〕矮狗

〔秉苑日涉十二〕犬名

矮狗、玉篇犬名、本作小犬、集韻、

猘子、酉陽雜俎、天寶中、上嘗於夏日、與親王棊、貴妃立於局前、觀之、數子將輸、貴妃放康國猘子於坐側、猘子乃上局、局子亂、上大悅、又見天寶遺事、

猘兒、高啓詩、猘兒偏吠客、鸚歌喚茶、雜記、猘兒吠客、板橋里而贏、武德中、獻猘、高六寸長尺、能曳馬銜燭、云出拂菻、中國始有拂菻狗、按高六寸長尺、自孔帖、作高六尺長數尺者誤、淵鑑類函引舊唐通典、唐武德中、高昌王文泰獻狗、雌雄各一、高六寸長尺餘、性甚慧、能曳馬銜燭、云本出拂菻、國中國有拂菻狗、自此始也、

雪猘兒、佩文韻府、康彥登詩、簾前驚起雪猘兒、

嬌猘、元微之詩、嬌猘睡且怒、

拂菻狗、唐書、高昌直西四千里、獻狗、按拂菻國、中國始有拂菻狗、菻或作森、

羅江犬、古今詩話、淳化中、合州貢羅江犬、甚小而性慧、常馴擾於御榻之前、每坐朝、犬必掉尾先吠、人乃肅然、太宗不豫、犬不食、及上仙、犬號呼涕泗、以至疲瘠、章聖初即位、左右引令前導、鳴吠、

馬鐙狗、留青日札、馬鐙狗長四五寸、可藏之馬鐙中者、唐高祖時、高昌獻狗、高六寸長尺、能曳馬銜燭、云出拂菻國、中國始有拂菻狗、菻或作森、

波斯犬、池北偶談、嘗於慈仁寺市、見一波斯犬、高不盈尺、毛質如紫貂、聳耳尖喙、短脛、以哆羅尼覆其背、云通曉百戲、索價至五十金、亦宋太宗桃花犬之屬也、

波斯狗、北史齊南陽王綽傳、綽留守晉陽、愛波斯狗、淵鑑類函引三國典要、齊高緯以波斯狗爲赤虎儀同、逍遙郡君、飼以粱肉、食縣邑、常於馬上設蹬、以抱之、

短狗、汲冢周書註、短狗也、廣東新語、獸則獵猶短狗、

羅江狗、東軒筆錄、慶曆中、衞士有變、震驚宮掖、臺官宋禧上言、蜀有羅江狗、赤而尾小者、其警如神、願養此狗於掖庭、以警倉卒、時人謂之宋羅江、

西洋狗、嶺南雜記、西洋狗、小者最貴、有黑者、有黃者、鬼子與之同飲食寢處、又有一種稍大而毛長尺許、深目短喙、狀如獅子、尤獰醜、

〔嬉遊笑覽十二〕拂菻狗、日本紀略に、契丹大猘二口、矮子二口と見えたり、矮子是なり、大猘は俗にいふ唐犬なるべしといへれど、矮子一本には猱子ともありて、定かならず、近くはいつの頃わたりしか、續山井の發句○珍花とてあいすべいかの犬ざくら、重昌、は、これをいへりと見ゆ、安澹泊答寒川儀太郎手簡、さつまより出候犬の一種ちんと申候、正字御尋にござ候、すべてかうやうのこと心に留不申、一切覺不申候、北齋書通鑑に有之候、東魏孝靜帝高澄に逼られ、朕々狗脚朕と申され候は、近代の落しば